

人間再発掘シリーズ



5度目の五輪を目指す重量挙げエース
パーフェクト
三宅宏実の「いま」

【デイリースポーツ制定「ホワイト・ベアスポーツ賞」受賞者編】

に、メダルが取れた選手、取れなかった選手の差も知った大会でした。目標を早く北京へと定めたいと、アテネの翌年には本格的に競技を再開しました。あの頃は、4年が短く、すぐにでも来てしまうように思えたものです」

「出場が目標だったアテネとは違、北京ではメダルを獲得したいと、その後5年に渡って続くとは、宏だまだ実力が足りない」と、離れて行くようにも見えるトップ選手の背中に、歯がゆさを抱えていたという。アテネの翌年にマークした日本記録191キは2年経っても、3年経っても1キすら更新できない。練習量を増やそうとする。身長147キ、体重が50キ前後の、と痛みが増してしまふ。競技を辞めたいと本気で考えた。倍もの重さと戦う。その重み、圧力しかし、父・義行は決して潰されそうになつたとしても、むしろ当然なのかもしれない。この競技で多くの薬物違反者が後を絶たない一因とは、こうした過酷さに克て母・育代も同じだった。「頑張り」と言う代わりに、少しでもケガの回復につながれば

オリピックに出場したい、との夢は、実際に初出場を叶えたアテネ五輪で「メダルを狙いたい」との強い目標を三宅宏実(33歳いちご)に与えた。しかもアテネは、当時、日本五輪史上最多となる37個のメダルを獲得する大躍進の大会だった。「精一杯やった、との感覚と同時にまさされ、腰以上につらく厄介な痛み」

「06年世界選手権で銅メダルを獲得」

「05年の日本新記録に続き、06年には世界選手権48キ級で銅メダルを獲得し、キャリアで初めて国際大会で表彰台に立った。大きな自信と手応えを持って翌07年にも世界選手権で5位に入つて、08年北京五輪代表に内定する。目標を捉えながら、股関節痛は消える日がなかった。アテネまでとは異なり、この4年は全日本の優勝だけではなく、国際舞台での結果も自らの実力を知る上での指標になつた。むしろ「世界で戦うためにはま

北京でメダルを——順調な成長と股関節痛との闘い



敬称略